

今年のカ園病害虫発生と防除対策を振り返って

コロナの影響を大きく受けた今年のカ業でしたが、カ園管理もほぼ終わりました。県内各地区の来年用栽培暦改定検討会も進み、病害虫の発生状況や防除対策の問題点なども検討されて、改定がされていますが、大きな変更はないようです。今回は今年のカ病害虫発生状況や防除対策の問題点など振り返り、来年の防除対策への参考にしたいと思います。

1 病害の発生と防除対策

○炭疽病・・・最も普遍的で、代表的病害炭疽病は、二、三番茶期は新芽生育期が梅雨期と重なり、発生はやや多くなりました。特に摘採時期を遅らせるドリンク茶栽培等では摘採葉に病葉が混入する被害などもみられ、新たな対応が必要になっています。一方、三番茶期では今年摘採を止め、深刈り、浅刈りなどが実施された園が多く、伝染源病葉の減少でその後の再生芽および秋芽前半への発生は少なくなりました。秋芽生育期では8月は下旬まで猛暑の晴天が続きましたので、秋芽生育前半の感染は殆んどみられませんでした。しかし8月25日以降相次ぐ台風と秋雨前線の影響で、雨天日が多くなりましたので、生育後半の感染が多くなり、9月中下旬に発病が多くなりました。

防除法としては、摘採を遅らせるドリンク茶栽培等では、萌芽-1葉期の防除では十分防除出来ませんので、ダコニール1000とEBI剤の混用による2葉期頃に遅らせる散布が望ましいと思われます。また、秋芽生育期の防除は、生育前半は降雨がなく、後半に降雨が続く気象であったため体系防除法、混用散布防除法とも散布が早すぎて十分な効果が得られなかった事例もありました。このため、発生に最も関与する降雨などで発生を予察した防除を考慮していく必要性を感じました。

○輪斑病 新梢枯死症・・・輪斑病は二、三摘採後に発生しますが、今年是一般園では防除不徹底や高温のため三番茶期にやや多く発生しました。また、二番茶後の深刈り、浅刈りなどの更新により再生芽への発生もみられ、今後この対応が大切と思われます。新梢枯死症は例年同様の発生が続いていますが、三番茶後の輪斑病防除の徹底と秋芽生育期は混用散布法で対応し、被害が少ないことからある程度の発生は黙認して良いと思われます。

○網もち病・・・最近多発化している病害で、今年も11月に入り、かなり発病がみられてきました。今年8月下~9月秋芽生育後半の多雨・多湿気候で感染が多くなったと思われます。2-4葉期の混用散布法とさらに4-5葉期頃(1週間後)の銅剤などの追加散布の重要なことが示唆されています。

2 害虫の発生と防除対策

○カンザワハダニ サビダニ類・・・この数年春期の発生は穏やかで、今年晴天温暖な天候で、発生しやすい条件でしたが、発生は少なく、一番茶等への大きな被害はみられませんでした。しかし、更新園の増加のため8月頃秋芽生育期の発生が多くなり、幾分秋芽の充実に影響がみられる傾向が続いています。これは、更新により天敵カブリダニ類減少の影響ではないかと推察されますが、今後この時期の防除の必要性は高まると思われます。一方、従来重要な防除時期とされてきた秋整枝後の発生は少ない状態が続き、防除の必要性は低下し、栽培暦採用もなくなりました。サビダニ類の発生も一番茶後から二番茶期に一部カ園で見られましたが、最近ではやや減少傾向です。

○チャノコカクモンハマキ チャハマキ・・・両害虫とも概ね平年並みの発生で推移し、大きな被害はみられませんでした。二番茶期と秋期に少し被害がみられた地域もありました。効果の高いジアミド系薬剤などの普及で大きな被害は少なくなっています。また、最近の発生傾向は従来と異なり、チャハマキの発生が多い傾向になり変化がみられます。南薩地区の一部で、フェロモン剤ハマキコン N(ローブ)も普及し、効果を上げています。

○チャノホソガ・・・やや平年より多い発生でしたが、一昨年の南薩地区の多発生被害のような発生はみられませんでした。越冬密度や新芽生育期と発生期が合うと発生、被害を生じますので、新芽生育初期の産卵、潜葉幼虫確認が重要です。特効剤ジアミド系薬剤は抵抗性発現拡大が懸念されますので、今後も注意が必要です。

○チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ・・・チャノミドリヒメヨコバイは二番茶期～秋芽生育期までやや多い発生で、一部園では被害がみられましたがチャノキイロアザミウマの発生は平年並みかやや少なく、被害は少ないでした。両害虫とも最近発生は全般に少ない傾向で、特にチャノキイロアザミウマの被害が少ない傾向がみられます。栽培暦で、基幹防除がすすめられており、使用薬剤の有効性が高いことが示唆されます。

○クワシロカイガラムシ・・・最近発生はかなり少なくなり、以前のように茶樹の枯死、枝条枯死、樹勢衰弱、茶葉黄化などの被害園はみられなくなりました。今年の発生も第1～3世代とも発生は少なく、特に防除を要するような茶園は少ないでした。ブルー MC 普及の効果の他コバチ類など天敵の影響が考えられます。

○チャトゲコナジラミ・・・本県に侵入し、9年経過し、殆どの産地茶園に発生が拡大しましたが、発生は落ち着いた状態で、成虫の乱舞による作業性への影響、煤病の多発生など寄生程度の高い状態の産地、園は少ない状況になっています。天敵寄生蜂シルベストリコバチの定着活動の影響と他害虫との体系同時防除により被害影響の少ない状態になってきています。天敵への影響が少ない薬剤による第1、3世代時の防除が有効なようです。

○その他マイナー病害虫・・・赤焼病の発生はこの数年極く一部園で発生が確認され、細菌密度の低下から、発生の心配は少なくなりました。また、黒葉腐病も梅雨期の二三番茶期の被覆栽培の減少などで、発生事例は少なくなっています。マダラカサハラハムシは秋芽生育期に発生が続き、今後も発生増加が懸念されます。ヨモギエダシヤクは局部的に発生し、ツマグロアオカスミカメも被害は少ないものの一番茶期に発生がみられています。

○防除上の課題・・・茶市況状況から三番茶期の摘採中止などに伴い本県でも一番茶生産のウエイトが高まる傾向になってきました。このため秋芽の生育充実を図るための秋芽生育期の防除がより重要になると思われます。主要病害虫の発生時期でもあり、体系防除等での確な防除が望まれます。秋芽生育期の病害防除は、今年からダコニール 1000 と EBI 剤の混用による 2-4 葉期 1 回散布法が多くで導入されました。この防除法は炭疽病、新梢枯死症、網もち病を安定して効率的に防除できる方法ですが、秋芽生育期の萌芽後最初の降雨から約 12 日後頃に散布することを基本に防除をすすめることが大切です。

害虫では、現在以前のような多発生被害が少なくなりました。特にカンザワハダニやクワシロカイガラムシでその傾向があります。これは恐らく、現在の使用薬剤は選択性が大きく、在来天敵類の活性化の影響が推察されます。この傾向を持続することが重要と思われれます。薬剤抵抗性や耐性菌発現による防除効果低下問題はみられませんでした。ストロビルリン系やネオニコチノイド系、ジアミド系剤などは発現の恐れが高いですので、年 1 回使用など多用、連用を避ける使用法の徹底が必要です。

最近、茶栽培も輸出茶、ドリンク茶、抹茶、有機茶栽培など多様になり防除も夫々対応が必要になってきました。今後更に技術確立を待ち、適切な防除をすすめてください。